

宮川は高田の大正二年八月二十七日の九二・九ミリを算出の基礎にして、流域面積二〇、七七九方里、平地面積六、一一六方里、流路一〇里二八町とみて、一方里当り降雨量二、八四〇立方尺、その四〇%を流出量とみれば、一方里当り一・一三六立方尺の洪水量があつたことになる。この種の計算は苦心の割りには、確率は必ずしも高くないと思うが、小谷で一、八三四立方尺、宮川一、一三六立方尺と、何れも洪水量が近似値になっている。この種の基礎的算出は、もっと数多く、綿密な資料で算出しておいて、洪水の資料にしたいと思う。ここでは一つの試算として、大正二年の降雨の際の洪水量との關係を算出した資料が、たまたま阿賀川河川事務所での依託研究の際、今後の資料に供したいと思つてノートしておいたので、拾い書きしておく。

大正二年の洪水は会津盆地の洪水としては著大であり、そのために県が災害調査を待つて、やがて五カ年改修計画を樹立するまでになつたのであるから、資料を充分尽しておくべきであるが、このように断片的にしか得られないのは残念である。ただ筆者は鶴沼川流域の、北会津村の対岸である新鶴村新屋敷新田の洪水常習地で育ち十一歳でこの洪水に直接あい、堤防が決潰して部落全部が水浸しになつた体験をよく覚えてゐる。北会津村の古老にも、この記憶を新たににして、後輩に語り聞かせようとしてゐる人々も多いかと思う。断片的資料を結びあわせても、その洪水の実態がほぼ想定されてくる。それによつて盆地底の浸水地域をつくつたのが、洪水の項にのせた分布図であるが、阿賀川改修計画実施前、特に泡の巻捷水路の開さくさえ考慮されなかつた当時、勿論日橋川合流地点より下流は、溢水地域として予定され、作物の耕作形態まで変えていた頃であるから、標式的洪水といつてもよく、低地域には何れも溢水して、旧河底を再現、蛇行の甚しい箇所は決潰するなど、遺憾なく荒し廻つた盆地洪水の正体のようであつたと思われる。今後これが永くどの程度まで防止できるかが、改修の効果というものであらう。